様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００３９８

研究課題名（和文）分断するアメリカ社会におけるエマソンの横断的知性と奴隷制廃止運動

研究課題名（英文）Ralph Waldo Emerson's Cross-sectional Intellect and Antislavery Movement in a Divided American Society

研究代表者
小倉　いずみ（Ogura, Izumi）

大東文化大学・法学部・教授

研究者番号：００１８５５６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は19世紀アメリカの奴隷制廃止への動きをアメリカ独立革命から南北戦争、再建の時代まで探究した。憲法で沈黙された奴隷の処遇は19世紀に大きな論争を呼び、社会的正義を求める動きは19世紀に拡大した。エマソンによる1844年の「英国領西インド諸島における奴隷解放10周年記念講演」は、彼が奴隷制廃止を扱った最初の講演であった。さらに1850年の逃亡奴隷法に抗議する二つの講演は、彼の知性が大衆に大きな影響力を持った事実を示す好例である。本研究は文学におけるエマソンの思想だけではなく、彼の自己信頼がどのように社会と関わるようになったかを歴史的文脈の中で分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は現代のアメリカの分断の状況を背景に、その根底にある19世紀アメリカの奴隷制廃止への動きをアメリカ独立革命から南北戦争、再建の時代まで探究した。エマソンは1844年から奴隷制廃止を扱った講演を行った。1850年の逃亡奴隷法に抗議する二つの講演は、彼の知性が大衆に大きな影響力を持った事実を示す好例である。南北戦争中の1862年にはリンカーン大統領に面会し、講演「共和国の命運」や「アメリカの文明」を行い、奴隷制の廃止を訴えた。文学は抽象論ではなく行動を伴うと考えたエマソンは21世紀の分断する社会で再評価されており、本研究は奴隷制廃止という政治を19世紀のアメリカ文学に組み込んだ成果を出した。

研究成果の概要（英文）：This project focused on Ralph Waldo Emerson's Antislavery writings and how he transformed from antislavery to radical abolitionism. He started antislavery lecture in 1844 and strongly opposed to the compromise of 1850, especially the Fugitive Slave law. He met President Lincolon in 1862 and delivered lectures "Fortune of Republic" and "American Civilization." The two lectures were edited by James Elliot Cabot and lost the original form, but the Harvard University edition restored them and we know how radical Emerson was against slavery during the Civil War.
The project published a book Ralph Waldo Emerson and Abolitionism of Slavery in 2023. My book dealt with the slave trade which began in the 15th century and explored its development by European powers. The abolition began in England, but it also became a big movement in the States in the 19th century. Emerson and transcendentalists in Boston were strong supporters of abolition and very active in writing and lecturing.

研究分野：アメリカ文学とアメリカ思想史

キーワード：ラルフ・ウォルド・エマソン　奴隷制廃止主義　奴隷貿易の歴史　リンカーン大統領　「共和国の命運」講演　「アメリカの文明」講演　アメリカ植民協会　奴隷制廃止と補償問題

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アメリカ文学における本研究の先行研究は F. O. Matthiessen の *American Renaissance* (1941) に始まる。エマソンの研究は 1970 年代に Joel Porte (*Representative Man,* 1979) が作品分析を行い、John McAleer (*Days of Encounter,* 1984) が伝記を著した。1982 年の没後 100 年を記念して、Evelyn Barish, Philip F. Gura, Alfred von Frank, Lawrence Buell などが研究書を出版した。最近では Elise Lemire の *Black Walden* (2009) はコンコードのウォールデン湖周辺に住んでいた自由黒人の土地所有に焦点を当て、北部における自由黒人の境遇と彼らへの偏見を明らかにしている。

奴隷制は大航海時代にアフリカ大陸を探検したポルトガルが 15 世紀に奴隷貿易を始めたことから広がった。2000 年代に David Eltis と David Richardson によって過去 400 年間の奴隷貿易の 35,000 件以上の航海データ Transatlantic Slave Trade Database の TSTD1 と TSTD2 が構築されたが、本研究は奴隷貿易の拡大に関してエルティスとリチャードソンが出版した著書 *Atlas of the Transatlantic Slave Trade* (2010)を背景にしている。

奴隷制は政治においても大きな課題であるため特定の作家からアプローチすると狭くなるが、本研究は一般大衆に影響力が大きかったエマソンを中心に置き、作家のヘンリー・ソローやストウ夫人の著作を分析し、ハーパーズ・フェリー事件のジョン・ブラウンとのかかわりを探求した。またエマソンと親しかった政治家のチャールズ・サムナーやウェンデル・フィリップスなどの奴隷制反対論者がどのように奴隷制廃止を推進したかを分析した。ボストンで活躍した超絶主義者は抽象的な議論と自然観を特色とするが、彼らは決して空虚な思想家ではなく奴隷制廃止運動では過激派であった。1850 年代のアメリカ・ルネサンスの文脈の中で、エマソンを始めとする知識人は社会的正義の実現という目的のために何をすべきかを模索した。

２．研究の目的

本研究は反知性主義が席巻する現代のアメリカの状況を背景に、その根底にある 19 世紀アメリカの奴隷制廃止への動きをアメリカ独立革命から南北戦争、再建の時代まで探究することを目的とした。憲法で沈黙された奴隷の処遇は 19 世紀に大きな論争を呼び、社会的正義を求める動きは 19 世紀に拡大した。

奴隷制については植民地時代から奴隷反乱が起きていたが、歴史に記されることはなかった。1791 年のフランス領サン・ドマング（キューバの隣島）で奴隷反乱が起き、Toussaint Louverture の指導で奴隷側が勝利し、1804 年にハイチ共和国としてフランスから独立した。1822 年にはサウス・カロライナ州チャールストンで Denmark Vesey の奴隷反乱、31 年 8 月にはヴァジニア州でナット・ターナーの反乱が起きた。39 年にはアミスタッド号の奴隷反乱が起きたが、1841 年の連邦最高裁判決で反乱奴隷は解放された。こうした奴隷反乱の動きから北部を中心に 40 年代に奴隷制への批判が広まった。

エマソンによる 1844 年の「英国領西インド諸島における奴隷解放 10 周年記念講演」は、彼が奴隷制廃止を扱った最初の講演であった。さらに 1850 年の逃亡奴隷法に抗議する二つの講演は、彼の知性が大衆に大きな影響力を持った事実を示す好例である。文学は抽象論ではなく行動を伴うと考えたエマソンは 21 世紀の分断する社会で再評価されており、本研究は現実の政治を文学に組み込むことを目的とした。

本研究は今までのエマソン研究において未開拓の分野である 1850 年以降の奴隷制問題と連邦政治がどのようにエマソンの思想に変化を起こしたかを分析した。若き時代のエマソンは雄弁を目指し、マサチューセッツ州上院議員の Daniel Webster を模範としていた。しかし彼への崇拝は 1850 年の妥協で糾弾に転じた。ボストンの政治家や文化人は 1859 年のジョン・ブラウンによるハーパーズ・フェリー攻撃を擁護した。ブラウンの評価には賛否両論があるが、この事件の影響力を見た William Lloyd Garrison は奴隷制廃止に関して南部への道徳的な説得には限界があることを認識した。過激派の Wendell Phillips は 50 年代の南部寄りの政策は、奴隷制を破壊するためには何の役にも立っていないことを人々が認識すべきだと主張し、Theodore Parker や Thomas Higginson を含む北部知識人の反奴隷制支援グループである Secret Six は武力行使へと動いた。歴史的にアメリカの知識人は行動的だが、その源泉には自分たちこそが奴隷制廃止の原動力だったという意識が存在する。本研究はアメリカに見られる正義への意識の継承と社会における人種による分断を南北戦争後の時代においても考察した。

３．研究の方法

本研究はアメリカでの現地調査を進めながら、研究成果を日本とアメリカの学会で発表した。

(1) 国内外における研究発表

アメリカにおける研究発表は Northeast Modern Language Association で 1 回、全米ソロー学会で 2 回行った。Northeast MLA の年次大会については、アメリカに出張を予定していたが、コロナウイルスの影響からオンラインとなった。

全米ソロー学会は毎年 7 月に開催される。22 年 7 月は未だコロナウイルスの影響はあったが、

帰国時に陰性証明が取れれば出張できるようになった。大会は対面とオンラインの両方で行われ、私の発表は同時配信され、録画は 12 月まで視聴可能だった。このパネルでは 25 分間の発表ができた。23 年 7 月の年次大会はラウンドテーブル方式で、発表時間が 10 分と短く、その後ディスカッションが 30 分行われた。聴衆は 70 人で盛会だった。

国内の発表は 22 年 4 月に初期アメリカ学会で研究発表を行った。日本語の発表は 1 時間、質疑応答を 1 時間行った。日本ソロー学会の学会誌『ヘンリー・ソロー研究論集』に書評を掲載した。論文は日本英文学会関東支部の学会誌に論文を寄稿し、アメリカ学会の英文論集に英語論文を寄稿した。また初期アメリカ学会で単行本を出版した際に、編集委員を務めた。

(2) 現地調査

現地調査は研究発表をする際にできるだけ実施してきたが、本研究期間はコロナウイルスの影響から最終年度 23 年度のみ可能だった。コンコードではエマソン邸宅に行った際に、私が著書の出版を計画していることをガイドに伝えたら、刊行されたら送ってほしいと言われた。他にはオルコットの家と旧牧師館を見学した。

(3) 海外共同研究者との打ち合わせ

海外共同研究者はハーバード大学のデヴィッド・ホール先生、ジョンズ・ホプキンズ大学文学部教授のラーザー・ジフ先生、ボストン大学のアラン・ローソン先生、Lebanon Valley College の Gary Grieve-Carlson 先生にアドバイスをお願いした。私がアメリカで発表する前には原稿をチェックしていただき、論理的な構成に関するアドバイスをしていただいた。

(4) ホームページにおける研究活動の公表

アメリカでの研究発表や研究成果の公表に関してはホームページで随時行った。

４．研究成果

(1)初年度の 2020 年度はアメリカ学会の学会誌に英文論文 “The Concord Community: Ralph Waldo Emerson and the Antislavery Movement”が掲載された。エマソンは 1862 年 2 月にリンカーン大統領と面会した。本論文は 1861 年末のトレント号事件を中心にリンカーン政権の閣僚との交流を描き、さらにエマソンの奴隷制反対運動がどのように展開してきたかを 1844 年の「英国領西インド諸島における奴隷解放 10 周年記念講演」からたどった。

研究発表に関してはオンライン会議となった Northeast Modern Language Association 52nd Anniversary Convention において司会と発表の両方を担当した。セッションのタイトルは “Reform and Social Justice in 19th-century American Literature”で、アブストラクトは 8 人から提出されたため、パネルを Part 1 と Part 2 に分けて海外共同研究者のゲアリー・グリーブ・カールソン教授と司会を分担した。2020 年度はコロナウイルスの影響から海外出張ができなかったので、資料の収集はオンラインで行った。

(2)2 年目の 2021 年度は日本英文学会関東支部の定期刊行物にエマソンによる奴隷制廃止に関する論文を発表した。南北戦争について彼が発言した内容は研究されておらず、本論文は『後期講演集』を使用して「共和国の命運」講演を分析した。また 1862 年 2 月にエマソンがリンカーン大統領に面会した際にスミソニアン・インスティテューションで行った講演「アメリカの文明」も扱った。

(3)3 年目の 2022 年度は渡航制限が緩和されたので、7 月にマサチューセッツ州コンコード市で開催された全米ソロー学会において発表を行った。また初期アメリカ学会において日本語で奴隷制廃止主義に関する研究発表を行った。

初期アメリカ学会では学会として単行本の出版を計画したので、私は編集委員として査読と編集を担当した。『改革が作ったアメリカ』（小鳥遊書房）は年度末の 3 月に刊行された。

(4)最終年度の 2023 年度はアメリカでの研究発表と研究成果の単行本の刊行をした。7 月にボストンに渡航し、全米ソロー学会の年次大会で発表 “Emerson’s Lectures on Abolition during the Civil War: ‘American Civilization’ and ‘Fortune of the Republic’”を行った。

本研究の集大成である『ラルフ・ウォルド・エマソンと奴隷制廃止主義』（金星堂）を 8 月に刊行した。本書は 1400 年代に大航海時代の奴隷貿易から始め、スペイン、オランダ、英国へと奴隷貿易が発展した経緯を解説した。エマソンの奴隷制反対運動、1850 年代の政治と文学、南北戦争と知識人、戦後のエマソンの動き、晩年のエマソンと草稿の整理など彼の生涯全体を俯瞰する著書となった。この著書は科学研究費補助金研究成果公開促進費学術図書（課題番号 23HP5035）を得て出版された。

2023 年度は戦後の「再建」を中心に、トマス・ウェントワース・ヒギンソンにも研究を広げた。彼は南北戦争における最初の黒人部隊である First South Carolina Volunteers を指揮した大佐で、サウス・カロライナ州のボウフォート砦での元奴隷の兵士たちの様子を『陸軍の生活』に著した。文筆への情熱と将校としての武勇をあわせ持つヒギンソンはエマソンの影響を強く受けており、政治と文学を横断した知識人である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 小倉いずみ	４．巻 1
２．論文標題 奴隷制廃止をめぐるエマソンの視座--変貌する社会と知識人の役割	５．発行年 2023年
３．雑誌名 改革が作ったアメリカ――初期アメリカ研究の展開	６．最初と最後の頁 251-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小倉いずみ	４．巻 14
２．論文標題 「南北戦争中のエマソンによる奴隷制廃止講演――「アメリカの文明」と「共和国の命運」をめぐって――」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『関東英文学研究』『英文學研究』支部統合号	６．最初と最後の頁 11-19（51-59）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Gary Grieve-Carlson	４．巻 vol. 49, no. 2
２．論文標題 “‘was it puritanism, or was it fish?’ Revising History in Charles Olson’s The Maximus Poems”	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Clio: A Journal of Literature, History, and the Philosophy of History	６．最初と最後の頁 161-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Gary Grieve-Carlson	４．巻 N.A.
２．論文標題 John Brown's Body	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Library of Congress, National Recording Preservation Board: https://www.loc.gov/static/programs/national-recording-preservation-board/documents/John-Browns-Body_Grieve-Carlson.pdf	６．最初と最後の頁 N.A.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Izumi Ogura	4．巻 31
2．論文標題 The Concord Community: Ralph Waldo Emerson and the Antislavery Movement	5．発行年 2020年
3．雑誌名 The Japanese Journal of American Studies	6．最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小倉いずみ	4．巻 46
2．論文標題 書評　テリー・ウィリアムス著、伊藤・岩政・佐藤訳『大地の時間』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ヘンリー・ソロー研究論集	6．最初と最後の頁 89-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小倉いずみ	4．巻 49
2．論文標題 書評　高橋勤著『野生の文法』	5．発行年 2024年
3．雑誌名 ヘンリー・ソロー研究論集	6．最初と最後の頁 91-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小倉いずみ	4．巻 91
2．論文標題 奴隷制廃止をめぐるエマソンの視座――変貌する社会と知識人の役割	5．発行年 2022年
3．雑誌名 初期アメリカ学会ニューズレター	6．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Izumi Ogura
２．発表標題 Emerson’s Changing Perspective on the Problem of Slavery
３．学会等名 Thoreau Society Annual Gathering 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小倉いずみ
２．発表標題 奴隷制廃止をめぐるエマソンの視座――変貌する社会と知識人の役割
３．学会等名 初期アメリカ学会第87回例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Gary Grieve-Carlson
２．発表標題 Getting the Truth from Poems: Charles Olson and Alfred North Whitehead
３．学会等名 Northeast Modern Language Association 54th Convention（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Izumi Ogura
２．発表標題 Emerson’s Lectures on Abolition during the Civil War
３．学会等名 Northeast Modern Language Association 52nd Anniversary Virtual Convention（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Gary Grieve-Carlson
２．発表標題 Us and Them: Defining the Origins of American Identity
３．学会等名 Northeast Modern Language Association 52nd Anniversary Virtual Convention（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小倉いずみ
２．発表標題 Emerson’s Lectures on Abolition during the Civil War: "American Civilization" and "Fortune of Republic"
３．学会等名 Thoreau Society Annual Gathering 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 佐久間みかよ、橋川健竜、増井志津代、小倉いずみ編著	４．発行年 2023年
２．出版社 小鳥遊書房	５．総ページ数 302
３．書名 改革が作ったアメリカ――初期アメリカ研究の展開	

１．著者名 小倉いずみ	４．発行年 2023年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 440
３．書名 ラルフ・ウォルド・エマソンと奴隷制廃止主義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Academic Achievement
http://aachieve.server-shared.com/~izumi

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ホール　デヴィッド・ (Hall David)	ハーバード大学・Divinity School・Research Professor	
研究協力者	ジフ　ラーザー (Ziff Larzer)	ジョンズ・ホプキンズ大学・English Department・Research Professor	
研究協力者	グリーブ・カールソン　ゲアリー (Grieve-Carlson Gary)	レバノン・バレー大学・English Department・Professor Emeritus	
研究協力者	ローソン　アラン (Lawson Alan)	ボストン大学・History Department・Professor Emeritus	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

米国	Lebanon Valley College	Harvard Divinity School	Johns Hopkins University	